

# 屋根裏の皇女

NOIF  
project

Vol.9

敗戦の傷跡は深く至る場所をえぐっている。一番街は僕の住む場所だ。かつては人も店も溢れて華やかだった。今はどこもみな陰気で薄暗い。皇族はすべて捕らえられ、一番街からほど近い広場で見せしめに公開処刑された。広場の敷石は真っ赤に染まり、今もなお当時と同じ鮮やかな赤色のまま落ちない。三人きょうだいでいちばん下だけ女の子だった。歳が近かったので親近感があったからか、彼女が国事で国民の前に姿を現すとき僕はいつも彼女ばかりを眺めていた。彼女は笑顔がどこかぎこちなくて、それは自分の立場に戸惑っているように僕には思えた。話したことなんてもちろんありはしなかったけど、僕は彼女が好きだった。彼女が皇族でなければ僕は彼女と話すことが出来たかもしれないし、彼女が処刑されることもなかったのかもしれない。

配給された食糧の僅かな包みを抱え、僕は一番街へ向かって広場を歩く。名前も知らない大きな樹木が赤く染まった敷石に薄い影を落としていた。僕はそれを踏まないように歩いてゆく。すぐ傍に青い屋根の寂れた家があった。屋根裏の小さな窓にも同じ色のカーテンがかかっている。壁にはいくつもの弾痕が残っていて、なかに人の気配はない。よく知った場所のはずなのに僕は誰がそこに住んでいたのだったか思いだせないでいる。

ふいに屋根裏のカーテンがゆらゆら揺れたかと思うと、綺麗な女の子が顔を覗かせる。こちらに向かってぎこちなく笑い、瞬きをするあいだに居なくなる。目を凝らして見つめてももう見えない。幻？ そうかもしれない。願望？ そうかもしれない。カーテンがゆらゆら揺れている。僕は彼女が好きだった。

婆ちやも母ちやもちい姉も、十三歳になる晩には、オカシラ様の社に泊まったそうだ。

「村の娘はな、その晩だけは、オカシラ様の花嫁になるだ」

私は、松川に住む健兄のお嫁さんになると決めていたから、その因習がとても酷なものだと感じた。

十三になった朝、綺麗なベベを着せられて、ご馳走の前に座らされた瞬間、何だか酷く厭わしい気持ちになって、「いやだいやだ」とわんわんと泣いた。父ちやが叱っても、母ちやがなだめでも治まらず、しまいには爺ちやまでが出てきて、私は何べんも叩かれた。叩かれるのも厭だったが、普段は優しい爺ちやが、この時だけは人が変わったような顔になって私を打つのが、何よりも恐ろしかった。結局、私は幾人もの大人に抱え込まれるようにして、無理矢理、社に連れて行かれた。

狭い社内に押し込まれ、入り口に錠を掛けられた瞬間、もう家には戻れない、見捨てられたのだと思い込み、止めようにも止まらない絶望感が、嗚咽となって喉から溢れ続けた。

そんな私の前に、閉ざされた格子戸を隔てて、母ちやが語りかけた。

「なあに、何も怖がるこたあ無え。ちいと気味は悪いがな。一晚、な、一晚だけさ。その間だけ、オカシラ様を抱いて眠つとりやええ」

それから幾刻か――。

ほうほうと梟が鳴く。月が動いたらしく、社の窓から蒼い光が差し込んだ。私はそれを合図として、兼ねてから教えられていた手順に従い、オカシラ様との祝言を始める。散々泣いて泣いて、石のように乾いた諦観と、それでもなお拭いきれない不安感が、私の心の中で葛藤しているのを感じた。

まずは社の真ん中に床を敷く。家ではこんな上等な寝具など使ったことはない。蕩けるような絹の感触に、指が沈んだ。

それから私は、祭壇に祀られた小さな箱に近づいた。心臓がどっくどっくと重く拍動している。

箱の中身は既に知らされている。そこには、神の生首が入っているはずだ。私は今宵、オカシラ様と呼ばれる生首と、一晚同衾する。それが、婆ちやや母ちやの言う「オカシラ様の花嫁になる」儀式であった。

箱の蓋を開ける。幾重にも被さっている薄葉を除けて、顔面を上にして収まっているオカシラ様と対面した。漁師みたいに赤茶けた髪。皺々の顔の中心には、まるで天狗みたいな鼻が突き出ている。

異相ではあるが、生首というからにはよほど生々しいものを想像していただけに、何だか拍子抜けした。これでは干した猿の頭も一緒だなと思った瞬間、皺に埋もれたその目がかっと開いた。

その瞳は、まるで秋の空を思わせるような色だった。その秋穂の香りがするような目で、オカシラ様は私の心をきゅうと射抜いた。私はオカシラ様を箱から引き上げるなり、堪らない気持ちでその腕に抱きしめていた。

その晩、私は寝具の中で、どれだけ沢山のことをオカシラ様から聞いただろう。海の向こうの、唐国よりも遠くの国の話。オカシラ様がまだ胴体と繋がっていた時に、異教の徒から懸命に領地を守った話――。オカシラ様は、私の首筋に擦り寄るようにして、寝物語をたくさん聞かせてくれた。時折、オカシラ様の吐息や唇や牙が、私の首筋に触れる。その度にじわりと私は甘い陶醉を覚え、それが何度も繰り返されるうちに、私はいつしか深い眠りに落ちていった。

翌朝、目が醒めてみると、オカシラ様が蒲団の中に居ない。きっと祭壇の箱に戻ったのだろうと思った。

首筋がむず痒い。ぬらりとした感触。触れた指は、真っ赤に濡れていて、私は半月前の廁でのことを思い出した。腰巻にべったり着いた血。驚いて母を呼ぶと、お前も立派な女子衆の一員だと言われた日――。

社を出ると、燦々と照りつける朝のお日様が妙に鬱陶しく感じた。私は、首筋の血の跡を弄びながら、オカシラ様のあの空色の瞳のことばかり考えていた。

生命の清きも穢れも抱く恒河に、一人の少女が身を浸している。

恒河は、少女のホトから初めて垂れ落ちた血を、自身の一部として取り込む。

下流では、とうの昔に齢を数えるのを止めた老婆が、祈りの言葉を唱えながら沐浴する。

老婆の周囲ではしきりとあぶくが立っている。生命に成り損ねたものたちの叫び。老婆はそれを掌で掬いあげ、天に向けて放ち続ける。

男と女が川べりに佇んでいた。

女は胸に抱いた赤子を厭わしそうに見つめている。

「今回もあんまり良くないね。泣き声が気に入らないのよ」

そう言って、赤子を川の水に浸した。赤子は寝ているのか、冷たい水にぴくりとも反応しない。

「また取り替えるの？」

男がうんざり声でそう問うと、女もまたうんざり声で

「また取り替えるのよ」

と答え、赤子の首筋をナイフで一閃した。

ぱあっと切り口から金魚が溢れだす。何十匹も何百匹も。溶けず散らず、水面を真っ赤に染め上げていく。

金魚をすっかり吐き出した赤子は、ぺらぺらとした皮だけになった。女はそれをじゃぶじゃぶと濯ぎ、ぎゅうっと絞って手提げ袋に放り込む。

女の足許では、夥しい数の金魚の群が何だか名残惜しそうに蟠っていたが、男が川面に石を放り込むなり、たちまち霧散していった。

「血の海に糸が垂れて、ギロチンがたくさん」

「おねむり薬百錠飲んだら綺麗に死ぬる？」

「凍死ってどうかな」

と、屈託のない笑顔で少女が問う。

## 柊の原／白縫いさや

---

柊の葉がびっしりと植えられた原を歩くの。そこは雪で覆われていて柊の葉は見えないんだけど、裸足で歩くから、ざくざく、ざくざくって足に柊の葉が刺さるの。血が出るの。まっしろな雪の原に血の跡が続くの。とても痛い。なんで私はこんな目に会わなきゃいけないのってぼろぼろ泣くの。けど私は歩かなきゃいけないから歩くの。だってそういう風にメイレイされたから。私は歩くの。柊の原を歩くの。真赤な血が真白な雪を染めるの。

もうだめ、倒れちゃう。そう思った頃に地平線の彼方に人影が見えるの。私を優しく抱きしめてくれる素敵な人で、私はその人を目指すの。そこまで行ければ私はもう大丈夫。私は泣きながら笑って、あともう少しもう少しって自分に言い聞かせるの。そうしたら柊の葉が突然芽吹いて、一瞬で巨大な柊の森になるの。私は途方に暮れるの。

商店街を抜けると街灯が徐々に少なくなる。夜桜ばかりが白い。一步前を歩く彼の気配は濃くなり、わたしは安堵するような、緊張するような、中途半端な心持ちになる。

思わず袖を引っ張って、摘んだそれが彼の服ではないことに気が付いた。これは、シャツなんかじゃない。

「蝙蝠に気をつけな」

と彼の声がした。手の中のそれが、バタバタと暴れる。

「白い蝙蝠がいるんだ。ほら、あの樹」

手の中の蝙蝠に引っ掛かれて、指から血が流れる。血の匂いに、桜の花が色めき立つのがわかった。

桜の花びらが、一斉に飛び立つ。

今日、私は森へ行く。たくさんきのこを採るためだ。私はきのこになりたい。美味しいきのこ、毒きのこ、闇の中で仄かに光るきのこに弾けるきのこ、きのこの世界は不思議に満ち満ちていて可愛らしくて、私をすっかり虜にしてしまう。私は森へ行くのだ。森の入口はぽかんと空いていて薄暗かった。私はきのこになりたい。ぬかるんだ道を、藤の籠を片手にずんずん進んでいくと、深い緑が空を覆った。鳥が鳴いている。きのこは木の根元や倒木の裏でひっそり息づいている。私が探しているきのこはどこにいるのだろう。鳥の鳴き声がぐるぐる反響している。母さんの悲鳴みたいだった。ごめんね、母さん。私はきのこになりたい。

私は血を流すきのこを探している。世の中にはそういうきのこもあるのだ。凶鑑で見た。傘に傷がつくとそこからぷくぷくと血を溢れさせるのだという。私はきのこを探した。見つけたらいつでも確かめられるように、右手にはナイフを握っている。私はきのこになりたいから。そしてとうとう血を流すきのこを見つけた。それは倒木に群生していた。薄紅色の小さく可憐なきのこだった。凶鑑で見た通りだった。籠からガラスの瓶を取り出し、ぷくぷくと溢れる血を集めた。一本のきのこから採れる量は決して多くはないけど、きのこは群生しているから全部集めればそこそこの量になる。ぷつ、ぷつ、ときのこを切っては血を集めた。あともう少しできのこになれるから、私は嬉しい。瓶はきのこの血でいっぱいになった。

集めた血を抱えて先生のところに行く。先生は村の外れに住んでいるお医者様だ。先生、と私が戸を開くと、先生はゆっくりと振り向き私を迎え入れてくれた。先生は私を寝台に寝かせ、腕に注射の針をそっと刺した。きのこの血を私の中に入れるのだ。こうして身体をきのこでいっぱいになれば私はきつときのこになれる。夢が叶うのだ。可愛くなりたかった。戸をでたらめに叩き殴る音がするような気がするけど、それはどこかぼんやりと遠い世界のここのようで、私はからだがびりびりするような、ふわふわするような。先生がおでこにキスしてなでた。たくさんきのこの血が私のなかでひとつになって、わたしはかわいいきのこになる。

埃にまみれた姉の部屋を掃除する気になったのは、死後一年も経てばいいかげんに気持ちの整理もついただろうと思ったからだ。

思えば、まるきり似ていない姉妹だった。才色兼備と姉ばかりが褒めそやされ、いつでも引き立て役に甘んじなければならなかった私が姉を妬まなかったと言えば嘘になる。それでも姉は最期まで私に変わらぬ愛情を注いでくれたから、私も結局優しい姉を憎みきることが出来なかったのだろう。死にゆく姉の青白い顔を見下ろしながら、憎悪と恋慕を同時に抱いた。

姉の部屋に入り、忘れ去られて曇った鏡のなかに姉の姿を認めたとき、だから私は姉が私を恋しさに死後の世界から戻ってきたのか、それとも復讐しようとやってきたのかすぐにはそれと判断することが出来なかった。結局は何のことはない、それは死んだ姉などではなく私の姿が映り込んだだけの虚像でしかなかったが。曇りぼやけた顔ならば私も姉と同等に美しいのだというのは、何と皮肉な発見だろう。

ふと熱いものが胸を満たし、私はとっさに目の前の鏡の曇りを拭った。拭ってしまえば姉の虚像の失せることを判ってか、あるいはもっと間近に姉と向き合いたかったとでもいうのだろうか。

いずれにせよ私は、指先の感覚が失われてもなお、延々鏡を拭き続けた。